



本当の学びとは？ - 「たんしょち端緒知」「じっせんち実践知」「じんかくち人格知」

校長 三村 孝志

教育学者汐見稔幸さん（東京大学名誉教授、白梅学園大学学長）によると、最近は大学においても、学生指導が大事になってきているそうです。友人関係に悩み、退学する学生もいるらしい。汐見さんは、学生相談室に訴えたり、相談に来たりするのが親であるケースが多くなってきていると述べています。汐見さんは団塊世代であり、大学生が親に悩みを話すことにより違和感を覚えているようです。「せいぜい聞かれたら話す程度で、積極的に話すことなどありえない」と言っています。私は団塊世代ではありませんが、汐見さんの感覚は自分の感覚にかなり近いと思いました。汐見さんも言っているけれども、親が大学に相談に来ると言ったら「来るなよ」と言うような気がします。恥ずかしいからです。

汐見さんの分析では、最近の若者は親との関係に近い理由を「親以外の人との人間関係、つまりコミュニケーションを経験させてこなかった」ことに求めています。「昔の子どもは地域の人との関わりの中で社会性を身につけていった」と言っています。「今の子どもは〇〇で、昔の子どもは〇〇だった」というのは、わかりやすい説明話法であり、説得力もあります。しかし、簡単には断定できない気がします。中学生は、「君たちは人間関係能力が欠けている」と言われたら、何と答えるでしょう。少し聞いてみたい気がします。

汐見さんは、ある研究を紹介しています。

約20万年前、私たちの祖先であるホモサピエンスが誕生したが、これ以前のホモ属を比べると、集団の規模が大きいホモ属ほど大脳皮質が発達していた。つまり、人間の脳（考える力）を発達させたのは複雑な人間関係だということである。

「考える力」は人の中で育つのだと結論づけられるわけです。ある研究とは、ロビン・ダンバーの研究のことでしょうか。

汐見さんは、最近出版された『人生を豊かにする学び方』（ちくまプリマー新書）で、「学び」には三つの段階があり、それらを「端緒知」「実践知」「人格知」と名づけています。鎌倉幕府のことを例として次のように言っています。

このように、本当の学びというのは、「端緒知」「実践知」「人格知」と三層になって深まっていきます。

三つの知については、「端緒知」＝「いろいろな知識に触れて、物の仕組みや歴史など、何かを知るということ」、「実践知」＝「自分なりの疑問や課題を持って、いろいろと調べたり、人とディスカッションしたり、記録して分析したりして、知識を深めていくこと」、「人格知」＝「その人の人格形成になんらかの影響を与えるような学びに発展していく」とことと定義しています。

人やものと接して具体的な体験をすることで、ものの本質が見えてきます。こうした具体的な体験を、僕は「他者をくぐる」というふうに言っているのですが、自分と異なる存在を介することによって、本当に自分が大切にしたいものが、よりはっきり見えてくるのです。

多分私たちは、自分の内面を凝視しているだけでは、本当に大切なものに気づかないのです。他者は自分ではありませんから、思うとおりにはありません。他者を思うとおりにできる社会は、想像してみればわかりますが、大変危険な社会です。無法な社会か、あるいは絶対的な権力者が存在する社会です。

相手を尊重するがゆえに、人間関係では悩みや苦しみが生まれます。しかし、悩みや苦しみの原因である他者は、喜びや楽しみを感じさせてくれる存在でもあります。このような二重性をもっていると考えられます。私たちは、集団の中でしか生きることはできません。

よりよい集団とは何かを考えること、より多くの人々が幸福である社会を構想すること、人間の学びは、そこに収斂（しゅうれん）していくように思います。今のところ、人類はそのような社会の構想を示せてはいません。

まずは、人間関係能力を身につけること、それとともに、本当に大切にしたいものをとらえること、そして、一人一人が人生を豊かに生きることができるとする社会を築くために努力することが大事なのだと思います。

※汐見さんの本は大変おもしろいので読んでみるといいですよ。